

問題は、「ハイヌウェレ型神話 (傍点筆者)」にあった。幾度かくり返したように、インドネシアのモルッカ諸島、セラム島に住むウェマーレ族の娘ハイヌウェレ、その名に由来するこの神話は、その類型を環太平洋の広大な地域にもつ。日本でも記紀のいずれにもみられることは確認済みのことである。前稿では、さらに遡り縄文時代中期に出現した土偶にその類型をみた。入念に丹精を込めて作っておきながら、そのほとんどは人為的に破壊され、その破片は離れた別々の場所に運ばれたとしかおもえない発掘状況であるという。

吉田敦彦は、さらに、考古学者小野正文の所論を紹介・援用して論をつなぐ。

これらの土偶はなんと、破片になる部分が、もともと別々の粘土の塊からできていた。そしてそれらを木や竹の芯を使って接合した上から、さらに粘土をかぶせ、その上に文様などをつけて仕上げる、という面倒なやり方(「分割塊制作法」: 筆者注)で作られていたのだ。…これらの土偶がつくられたのは、明らかに破片への分断が容易できれいにできあがるためだったに違いない。

記紀では、やがて、大宜津比売神<sup>おおげつひめのかみ</sup>(大気都比売神とも)や保食神<sup>うけもちのかみ</sup>(宇気母知能加微とも)として形象化されていくこととなる原型——殺され、身体を分断されることによって、人間に必要なよいものを生み出す母神としての働きをはたしてくれるという信仰が、この分割塊制作法による土偶に淵源するというわけだ。

そして、結論づけられる。

縄文時代中期における土偶のあり方からわれわれは、この時代にわが国にすでに、イエンゼンの言う「ハイヌウェレ型神話」の型に当てはまるような神話が語られていた。当時の人々は、その神話の主人公の母神である女神の姿を、土偶によって表していた。そしてその土偶を分断し、破片に分けることによって、古栽培民が生贄を使って実施してきたのと同じ意味を持つ、女神の殺害を表す儀礼を、祭りの中でくり返し行っていたと推測できる。

もちろん、この推測の依拠する小野の所論への反論・異論もさまざまにあることを承知していないわけではない。しかし、いわゆる学的に検証された諸事実にしそこからの厳密な推論といったものより、むしろ、当然そこにも網目のごとく縦横に通底していよう知的脈絡に依拠することをこととしたいのだ。なにより、「姫君何処におわすか」が、史実に依拠しつつ、しかし、どこまでもフィクションであらんとする、そこ、いわば虚実の皮膜に、無きがごとくして、しかし、どこまでも厳と拓ける知の領野を本稿の端緒としたくもあり、事実、目すところでもある。

本稿のたどってきたところを時系列化してみる。

ハイヌウェレ型神話——縄文時代中期出現の土偶——大宜津比売神・保食神——お影さま

末尾をなす項：お影さま(「姫君何処におわすか」)は、宗教学者中沢新一をして「聖性をめぐる最良の野生の表現に自分は今であっているのだ」とまでいわしめた——これも確認のところだ。ほかでもない、お影さまとは、大宜津比売神・保食神でもあり、縄文時代中期出現の土偶でもあり、またハイヌウェレでもあったからだ。

これも確認のことだが、神話の論理のなかには、独自の力動的な構造がセットして、ほっておくと、神話はみずからに内包する

論理規則にしたがって、ぐんぐんと変身し、変化をおこしていってしまう。しかし、「正統的権威」のようなものが存在すると、それがいわば去勢装置として機能し、こうした変身や変化の不測の動きを禁止しようとする。「イエスの生涯」をめぐる神話を、中沢は、その一例としてとりあげ、発達のある段階で完全に変形運動を止めた、とみる。共観福音書の「正典」化とグノーシス主義の終焉を指してのことか。

その正しく「キリスト教正統の世界」で、「反転」——もともになった神話の意味内容や登場人物の関係を、ひっくりかえしたり、ねじまげたりしながら、その内包する意味をもっともっと豊かに表現しようとする胎動——が二百数十年の潜伏の時を経て発覚した、というのだ、「お影さま」において、部連島の隠れキリシタンのもとにおいて。

直前に綴った——部連島の隠れキリシタンのもとにおけるお影さまが、大宜津比売神・保食神でもあり、縄文時代中期出現の土偶でもあり、ハイヌウェレでもあったのだ、と。しかし、閑話休題というわけでもないが、しばしここで立ち止まってみることにしよう。お影さまでもありとされた大宜津比売神や保食神は殺害され、その四肢をはじめ身体各部位からさまざまの穀物や蚕などを発生させるといういわば作物起源神話に登場する存在、縄文時代中期出現の土偶も破片に分断(=殺戮)されることで人間に必要なよいものを生み出す存在、ハイヌウェレはこの両者のいわば濫觴をなす。そして、そこにはいずれも「代理」、「置換」あるいは「等置」などといった事態、すなわち、substitutionが伏在する。かかる事態を可能にしているのが「遮蔽」にほかならなかった。しかし、部連島隠れキリシタンのもとのお影さまにおいてや、いかん。

まず、中沢のことばのあらためての確認から試みる。

前世紀にニューギニアの人々の社会を訪れた宣教師たちが、ハイヌウェレの神に選ばれた一人の少女に村の男たちがつぎつぎと交接をいどんでいく神聖な儀式を見て、腰を抜かさんばかりに驚いたのと同じように(傍点筆者)、部連島の人々も、神話的な教義に語られていることは、観念のレベルに留めておくだけではなく、現実にも実行しなければならない、という律儀さを発揮して、神父に深い苦悩をあたえる。

ハイヌウェレの儀式を執行する「ニューギニアの人々」と「部連島の人々」が「同じように」ということばで繋がれる。しかし、なにか、また、どこにおいて「同じように」であるというのか。「ニューギニアの人々」が「つぎつぎと交接を挑んでいく」と「部連島の人々」が「観念のレベルに留めておくだけではなく、現実にも実行」することが「同じように」であるというのか。あるいは、「ニューギニアの人々の社会を訪れた宣教師たちが…腰を抜かさんばかりに驚いた」と「部連島の人々も…神父に深い苦悩をあたえる」ことがそうであるというのか。もちろん、後者であることは文脈からしても自明のことであることからすれば、前者には「同じように」ではないという可能性もありうるということだ。

こうして、さきの系列が、すくなくとも可能性としては、修正の要ありということになる。そうであるとして、その修正はどこに、また、なぜ、そして、その意味してくることは…、といった問いが出来し、それへの対応に迫られましょう。それらは次稿にゆずることとしたい。